宮代町立須賀小学校の再整備等地域拠点施設整備プロジェクトチーム
視察研修（北海道安平町立早来学園）

１　日時・場所

令和５年１０月２６日（木）９：３０～１１：３０

北海道安平町立早来学園

２　出席者

安平町教育委員会：永桶教育次長、井内氏

宮代町：新井町長、小川副課長、関根主幹、吉田副課長、高林主査、高橋主査、島村主事、須原主事、福満主事、山下主事

株式会社東畑建築事務所：久保主管、門脇技師

Life Work：内海氏

３　施設概要

更新の概要	北海道胆振東部地震の被害による建替
設計コンセプト	早来中学校と早来小・遠浅小・安平小を集合し、義務教育学校とする。 「子どもにやさしいまちづくり」を目標に、子どもと大人が協働で学校づくりをし、町民参加ワークショップ「新しい学校を考える会」でも地域全体で学校を考えた。「開放」「共用」「専用」の３エリアで構成。 地域の活動と学校内の活動の双方が目に見えることで、子どもたちが新たな世界に出会うことを期待。
複合機能	・小学校 ・中学校 ・図書館(図書室) ・アリーナ(大・中) ・地域交流施設
施設概要	建築構造　RC 造＋木造 施設規模　延床面積　　７０８３．０５㎡ 材料　集成材(カラマツ胆震産) 製材(ヒノキ、トドマツ、マツ)　北海道産 用途　小・中学校

＜図面＞

1階

教室
光のプロムナード
図書室
エントランスホール
校務センター
キッチンスタジオ
創作アトリエ
中アリーナステージ
スタジオ
理数教室
理科実験室
大アリーナ
中アリーナ
木工室

1F

2階

教室
英語教室
国語教室
社会科教室

2F

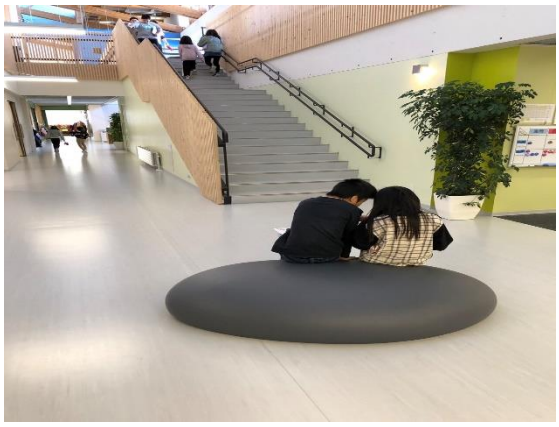
学校内案内図

築年数	約１年
建設期間	約１年
学校の沿革	平成３０年９月　北海道胆振東部地震 令和元年　基本計画・基本設計 令和２年　実施設計 令和３年７月　工事開始 令和４年１０月　工事終了 令和４年１２月　早来小中学校　引越し 令和５年１月　早来小中学校　新校舎での授業開始 令和５年３月　早来小・遠浅小・安平小・早来中学校閉校 遠浅小・安平小学校　引越し 令和５年４月　義務教育学校
防災機能	・指定避難所になっている。（７日から１０日間の運営想定） ・災害初期は大アリーナを使用する。 ・物品庫あり。 ・自家発電機は設置しておらず、不足がある場合には外部電源をつないで賄う予定である。

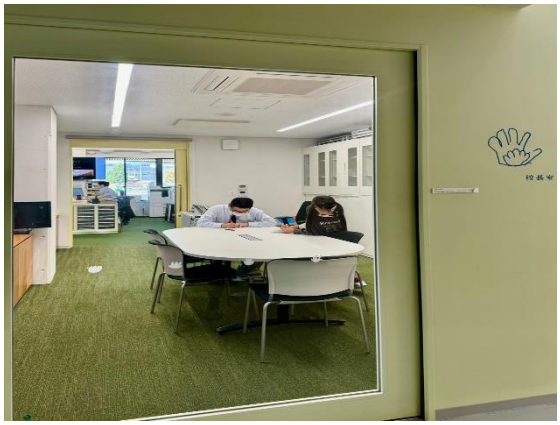
４　現地視察

（１）学校施設について

・町の教育方針やコンセプトに基づき、学年ごとに大きさや形が異なる教室や、遊び心や居心地の良さを重視した共有空間など、細部にわたって、アイデアや工夫が取り込まれている。



・教室だけでなく、廊下などにもただ座ったり、話すことができるエリアがたくさんあり、それぞれの子どもの過ごしやすい場所を見つけている。



・校長室が職員室や廊下から見えるガラス張りで、校長先生が子どもを一対一で指導している。

・保健室の入口が昇降口を通らずに入れる造りになっている。「学校に来たいけど、他の子どもには会いたくない」と思う子どもへの配慮だと考えると、親子共に安心できる。

（２）施設の特徴について

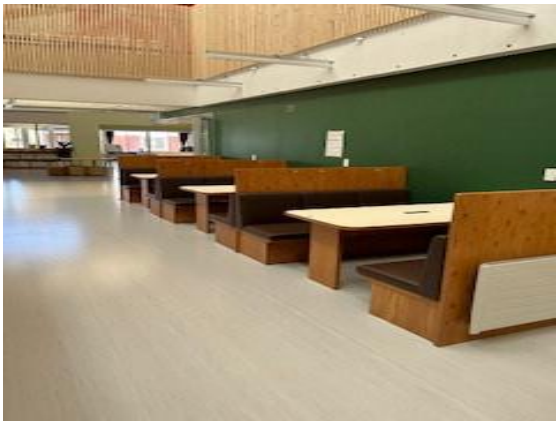
１つの施設内に図書室機能、義務教育学校、地域にも開かれている特別教室がある。学校の建物外に畑などが整備されていて、授業での必要に応じて、校外利用ができるようになっている。

・学校の図書室と地域の図書室を兼ねることや特別教室などを学校と地域の共有スペースにすることで、部屋面積の削減だけではなく地域の交流が多く生まれる場となる。

図書室は、住民の方が土足のまま入れる入口と子どもたちが校舎の特別教室を通って入れる入口に分かれている。校舎側への入口には学校関係者のみ通行可能なようにセキュリティが施されている。コンシェルジュが常駐しており、図書室だけではなく、共有スペースの利用などの相談ができる。

・とにかくこだわりがある図書室。地域の人や子どもたちみんなにとって大切な場所だからこそ、工夫や仕掛けを詰め込んで存在意義が高められている。

学校内の随所に共有スペースが設けられており、子どもたちは休み時間を自分の過ごしたい場所で過ごすことができる。
また、教室にこもりがちになってしまう中学生も、多世代交流ができるように校内の共有スペースに来て給食をとれるよう工夫がされている。



・共有スペース、学校施設内にみんなで過ごすだけでなく、「自分だけのスペース」を見つけられる仕掛けがされている。ここに来ることの意味はその人にあればよく、何かのきっかけで他者とつながることができればよいのかな、と自然に思える空間である。

地域開放されている特別教室は、学校側からは可動式の壁で仕切られている。
利用する場合は、授業での使用がない時間のみ、ネット予約できるようになっている。
インターネット端末があることで、子どもたちも現在の予約状況が確認できるとともに、地域の活動を見ることができる。

・予約システムがすぐその場で誰でもできる。空き情報やどの団体が使用しているかを子どもたちも見ることができ、そこから交流が生まれることもある。（裁縫教室）

・高齢者も気軽に来やすくなることに加え、子どもたちの活動の様子を見ることは地域の人の刺激にもなるということで、大アリーナの２階をウォーキングスペースにしている。

ステージは学校内で最も稼働率の低い場所ということで、音楽室としての空間を省き、ホールとステージを完全に仕切って音楽室として利用することとしていた。
ステージにもなる場所なので、十分な音響設備の中で授業を受けることができる。

・舞台が音楽室になる、空き時間・空き教室の有効活用法により、より高度な機材などを設置でき、活用の幅が広がっている。

教室は成長の状況や学習環境に配慮して、学年ごとに異なる設え・配置を行っている。
「教室」という名称を取り去り、「ルーム」と表記することで、学校は学ぶだけの場所ではなく、より広い世界と出会う場所という早来学園のコンセプトの実現をさせている。

特別教室は「アトリエ」「キッチン」等地域開放時に使用されることを意識して、名称を変えている。各ルームには科目を通して出会える世界が表記されており、目的が一致していればどの科目で利用しても良いことになっている。
また、子どもらしい設えにするのではなく、大人も使用しやすい設えが選択されている。

（３）ICT の活用について

・黒板はなく、ホワイトボードとプロジェクターを活用。教員には ipad と iphone を支給しており、職員室もフリーアドレス化されている。
・最新の ICT を考えても導入時には最新にならないため、また将来に対応できるよう Wi-Fi を強固に設置し、十分な環境で授業を行うことができている。

（４）安全面の確保について

・顔認証等を使用し、地域の方が学校施設に入ることができないセキュリティ対策を実施している。

（５）施設整備について

・構造がRC造と木造であり、木の温かみを感じる造りとなっている。
・壁はコンクリート打ち放しで、Pコーン穴を利用して掲示物などで使用している。
・露出配管はメンテナンス性の向上や、天井が高くなることの開放性や天井部材の減少によるコスト削減などの他に、スケルトンインフィルを直接見ることができ、子どもたちの学びの場の一環として提供している。

（６）防災機能について
・町民センターが避難所の中心となるため、避難所としては１週間から１０日間と考えている。
・災害の初期は大アリーナを使うことになる。
・自家発電機は設置していない。前回の被災で、発電機を用意してもらった経緯もあり、発電機がなくとも限られたもので対応できる。外部電源をつないで賄う。

（７）開設までのプロセスについて
・開設までの体制としては、教育環境計画については「教育環境研究所」、建築設計については「アトリエブンク」、ICT教育については「チームラボ」など、外部の力を使いながら検討を進めた。
・地域おこし協力隊、地域おこし企業人ファインディングベースなど外部の協力を得た。
・プロジェクト体制としては、教育次長（専任）、施設担当主幹（専任）、総合教育専門員（井内氏）の３名でスタートして、課長補佐、社会教育参事が加わり、建設課施設担当職員（１級建築士）、学校教育G主事（ICT関係）、指導主事（学習面）、社会教育（図書室担当）が加わり、徐々に従事者を増やしていった。役場でも最高のスタッフを集め、取り組んだ。
・開校に向けて校長、教頭等の事前の人員配置から調整を行っており、子どもの可能性を広げるためには指導する側の知識と考え方のアップデートを組織的に行う必要がある。
・早来学園は子どもの可能性を広げるための工夫をしており、「大人が考える子どもにと

って必要な環境」という枠で考えるのではなく、「子どもが新たな学びや未知の体験をするために邪魔をしない環境は何か？」というアプローチをしている。

（８）運営について

・地域施設の管理運営は、民間の地域おこし企業が運営を担っている。

６　所感

・学校のコンセプト『自分が“世界”と出会う場所　学校を通して「夢」「本物」「地域」「社会」と出会う。』とし、学校と地域を分けない、子どもが主体・子どもの社会参画を軸とした学校としている。そのコンセプトを実現するための学校施設としている。

・プロジェクトに専属職員を手厚く配置する一方、教育専門委員の井内氏をはじめ、教育環境研究所やチームラボ、東洋大学教授の長澤悟氏、地域おこし企業のファウンディングベースなど、外部の力をうまく活用して、プロジェクトを進めている。須賀小学校の再整備においても、町の職員体制の充実と外部の力の活用が大切だと感じた。

・早来学園に子どもを入れたいと転入してくる方がいると聞いた。魅力的・先進的な学習環境を整えることで、人口増は爆発的ではないかもしれないが、減少を食い止め、上昇傾向に持っていけるのではないか。

・一見すると否定的にとらわれがちなことも、見方を変えれば「学びの材料」になることもあるため、「…だからできない」ではなく「…すればできる」の方向性からアプローチし、併せてその際のリスクを検討することが、より良い再整備につながるのではないかと感じた。

・学校ができたらゴールではなく、子どもたちが愛着を持って学校生活を送ることで、卒業しても帰ってくるだろうし、代々守っていこうとする気持ちが育つのではないか。

・これからの社会を担う子どもたちに、先を見据えたICT環境やデザイン性のある設備(椅子や机など)を整えることは未来への投資。教員にとっては新しいことを覚えて活用していくため、ハードルが高く感じるかもしれないが、この機会に新しいものに子どもとともに触れることも教員にとっても良い機会ではなかろうか。

・従来のすべての学年が同じ広さの教室というものは、成長に応じた変化と真逆の考え方であると感じ感銘を受けたが、児童数の増減に伴う教室の転用などは困難に感じ、須賀小における効率的な方法の検討が必要と感じた。